

異文化間教育学会第34回大会
2013年6月9日(日)
於：日本大学

日本在住の言語的マイノリティの子どもの
二言語能力の関係
—物語文の聴解・再生課題の分析を通して—

大阪大学
日本学術振興会特別研究員
櫻井千穂

本日の発表の流れ

1. 研究の背景
2. 本研究の目的
3. 研究方法
4. 分析方法
5. 結果と考察
6. まとめと今後の課題

1. 研究の背景 (1) 現状の課題

- 20年余りの間、言語的マイノリティの子どもたちへの様々な支援
- 近年、日本生まれや幼少期に来日した子どもたちの日本語の教科学習言語能力 (ALP: Academic Language Proficiency, Cummins, 2003) の伸び悩みを指摘する教育現場からの声
- ALPの実態解明を目指す言語力調査の不足

1. 研究の背景 (2) 日本生まれの子ども の読書力調査 (櫻井2013)

- 集住地域のA小学校に通う中国ルーツの日本生まれの児童(NSC, n=63)と日本語母語話者児童(NSJ, n=92)対象の日本語読書力調査
- 年齢相応の読書力: NSC: 12.7%, NSJ: 48.9%
- NSC-NSJ間で音読速度に有意差あり
- 低学年では粗筋再生力(談話レベルでの理解再生能力)に有意差あり
- 高学年では行間・主題の解釈、意見の差
- 読書意欲は高学年ほど差が大きい

1. 研究の背景 (3) 理論的基盤

多言語環境におけるリテラシーとの
関わり度の教育的枠組み (Cummins, 2009)

リテラシーの到達度



印刷物へのアクセス／リテラシーとの関わり度



既存知識を
活性化し背景知識を構築する

足場がけを
して内容理解を助ける

アイデン
ティティを
肯定する

言語を伸ばす

1. 研究の背景 (3) 理論的基盤

二言語相互依存説(Cummins,1981)

学校や周囲の環境の中で言語(Ly)に接触する機会が十分にあり、またその言語(Ly)を学習する動機づけが十分である場合、児童・生徒が言語(Lx)を媒体として授業を受けて伸びた言語(Lx)の力は、言語(Ly)へ転移(transfer)し得る
(中島訳:カミンズ・中島,2011: 78より)

➤ 日本語を一言語とする調査

中島・ヌナス(2001), 朱(2002)の会話力
生田(2002)の作文力調査でも実証

1. 研究の背景 (3) 理論的基盤

二言語間の転移が起こる領域Cummins(2009)

- 1) 概念的要素
- 2) メタ認知・メタ言語ストラテジー
- 3) 語用論的な側面
- 4) 言語の形態上
- 5) 音韻意識

➤ただし、櫻井(2013)でNSC-NSJ間で有意差が確認された談話レベルでの理解再生能力の二言語の関係を扱った研究は未だみられない
(Genesee et al, 2008)

2. 本研究の目的

- ALPの重要な力の一つである読書力と関連のある談話レベルの聴解・再生力の二言語の関係を明らかにし、ALPの育成を目指した指導・支援方法を考察する

研究課題:

- ・二言語の聴解・再生力に相関がみられるか
- ・発話力(会話力)との関係はあるか

3. 研究方法 (1)

- 対象者: 南米スペイン語圏ルーツの
小学1年-中学3年の児童生徒 (n=52)
- 対象地域: 東海及び関西地方の7つの地域
- 発表者及びスペイン語母語話者協力者とで、
子どもと一対一の対面式調査を実施
- 二言語で物語文を読み聞かせ、口頭での
粗筋再生を促し、その後、内容に関する
10の質問を行う

3. 研究方法 (2)

- 参考データとして、OBC (Oral Proficiency Assessment for Bilingual Children) (カナダ日本語教育振興会2000) を用いて会話力を測定
- 保護者への家庭言語・学習環境に関するインタビューを実施

3. 研究方法 (3) 日本語テキスト

➤ 日本語:

坪田譲治著 『きつねとぶどう』

(「てのひら文庫」(文溪堂)の小学1年生用副読本)

- お腹をすかした子ぎつねのために、親ぎつねがぶどうを取りに行き、巣の近くまで戻ったところで猟師に遭遇してしまう。親ぎつねの声で子ぎつねは逃げることはできたが、親ぎつねはそれきり物語には登場しない。時を経て、成長した子ぎつねが、親ぎつねを探して昔の巣の近くにやって来たとき、ぶどうのつるを見つける。こんなところにぶどうがあったかと訝しがりながらも、ぶどうを口にする。その時、親ぎつねの「おいしいものを取ってくる」という声を思い出し、そこにぶどうがなっているわけがわかった。子ぎつねは親ぎつねにお礼を言った。

3. 研究方法 (3) スペイン語テキスト

➤ スペイン語 :

Vivian Cuesta編のギリシャ民話

LA OLLA DE ORO (『金の鍋』)

(レベル別読書教材EDLの小学1年生レベルテキスト)

- 悪い男が、森で金の鍋を持つと言われる小人に出会った。男は小人を捕まえ、金の鍋のありかを教えたら放してやると言った。小人は、ある木の根本に男を連れて行った。男は、赤いハンカチを目印として木に結びつけ、小人にそのハンカチを取らないように約束させた上で小人を放し、掘るためのスコップをとりうちに戻った。男が戻ってみると、ハンカチは取られていなかったものの、他の全ての木に同じ赤いハンカチが結びつけられていた。小人は、約束を破らずに、金の鍋を男に奪われずにすんだ。

4. 分析方法

- 内田(1996)に従い、テキスト全文をアイデアユニット(IU)に置換
- 「発端部」「展開部」「解決部」に相当する重要IUを同定(二言語ともに17IU)
- インタビュー内容を全て文字化し、子どもが再生したIU数をカウント、IU出現率を求める
- 事実理解、明示的事実関係理解、暗示的事実関係理解、主題解釈に関する質問の正答率を算出

5. 結果と考察 (1)

- 二言語の聴解・再生力に相関がみられるか
日本語とスペイン語の二言語相関

単相関	偏相関	
	滞日期間を制御	入国年齢を制御
.445**	.612***	.570***
(.001)	(.000)	(.000)

()内は有意確率(両側) ** $p < .01$, *** $p < .001$

5. 結果と考察 (2)

➤ 発話力(会話力)との内部相関があるか

日本語の内部相関

	会話力	
	基礎言語面	認知面
聴解・再生力	.743*** (.000)	.860*** (.000)

スペイン語の内部相関

	会話力	
	基礎言語面	認知面
聴解・再生力	.813*** (.000)	.899*** (.000)

***p<.001

5. 結果と考察 (3)

- 発話力(会話力)との二言語相関があるか
日本語会話力とスペイン語聴解・再生力

	日本語会話力	
	基礎言語面	認知面
スペイン語聴解・再生力	.083 (.563)	.429** (.001)

スペイン語会話力と日本語聴解・再生力

	スペイン語会話力	
	基礎言語面	認知面
日本語聴解・再生力	.128 (.365)	.340* (.014)

*p<.05, **p<.01

5. 結果と考察 (4)

- OBCの結果から、会話力の基礎言語面の力、会話の流暢度 (CF: Conversational Fluency, Cummins, 2003) を両言語である程度獲得していると判定された子ども (N=35) の聴解・再生力の二言語間の関係
 $r = .787$ ($p < .001$) と高位に近づく相関が確認された

5. 結果と考察 (5) 児童Aの日本語

8歳5ヶ月(小3), AOA:6歳10ヶ月, LOR:1年7ヶ月
日本語の聴解・再生課題達成率:70.4%

最初に子ぎつねはおなかがすいて}UI1、お母さんにおなかがすいたって言ってそれでお母さんが、ぶどうを取りに行行って}UI2、(中略)でやっとぶどうの木につい、着きました。それで(中略)子ぎつねのところに着いたときに}UI4あのちょっと疲れて}UI5、木に木の下にとまって、でその時に、えっとなんか犬がわんわーんっていう声をしてそれである、男の子が出てきて}UI7、あの子ぎつねを殺そうとして、そいである子ぎつねのお母さんがあぶないっていう、こ声を出して}UI8そいで子ぎつねが逃げて}UI9、でまだ子ぎつねが、なん、何年もたったのにお母さんが戻ってこないって}UI10そいで、あのあ母さんを探しに行ったら}UI11、あのー、昔に住んでいた、あの、巣があつて}UI13、そいで、あの、その前に木があつて}UI14、そいでぶどうを、食べて食べて}UI15。で終わり

5. 結果と考察 (5) 児童Aのスペイン語 スペイン語の聴解・再生課題達成率：81.1%

Esto, esto, una vez un duende estaba ahí }IU1y había un señor que se llamaba Greñudo. Y Greñudo sabía que los duendes tenían una olla de oro. }IU2
Entonces, Greñudo lo cogió al duende }IU4. (中略) “No te voy a soltar hasta que me digas donde está la olla de oro” }IU5, Entonces el le dijo, estaba abajo de este árbol }IU7, entonces para no olvidarse donde estaba, ese árbol }IU8, Greñudo puso, su, su, su esa cosa roja que tenía en su cuello }IU9. (中略) Entonces, le dijo Greñudo al duende que no saque esa cosa roja }IU10, entonces el duende lo prometió, pero lo que el duende hizo, le puso muchas cosas rojas en el árbol }IU14, 15. Entonces el excavó, excavó y sigue excavando }IU16, 17. Fin. 【訳：えっと、あるところに小人とグレニユドという男がいた。そしてグレニユドは小人が金の鍋を持っていることを知っていた。それでグレニユドは小人を捕まえた。(中略) それで「金の鍋がどこにあるか言うまで離さない」と言った。それで、彼(小人)は彼にこの木の下にあると言って、それで、その木がどこにあるか忘れないために、グレニユドは彼の首につけている赤いものを(木に)つけた。(中略) そして、グレニユドは小人にその赤いものをとるなと言って、小人は約束した(守った)けど、小人がしたことというのは、たくさんの赤いものを木につけたことだった。だから男は掘って掘って、掘り続けている。終わり。】

5. 結果と考察 (5) 児童Bの日本語

9歳5ヶ月(小4), AOA:4歳5ヶ月, LOR:5年

日本語の聴解・再生課題達成率: 27.7%

きつねはー、なんかー、おかあさんはー、きつね
 のー小さいの、なんかーおなかはー、すいたーでー、
 なくーの。でー、ま、お母さん、がー、なんかこ
 のー、やつーのー、でーとれてー、(11)でーいっ
 こー、落ちた。でーね、なにかー、(4)こんのやつ
 のー、なんか来たでー、わんわんってー、で、この、
 でー、でー逃げなさいってー、ゆった。でー、でー
 逃げた。でー何かー、こうとれてー、かあさんーに
 ちさいとーに、これはも、持ってきたのー。でー、
 (2)おわりのー、なにか、こう母さんありがとうって
 いった。でー終わり。

5. 結果と考察 (5) 児童Bのスペイン語 スペイン語の聴解・再生課題達成率：28.4%

Bueno el no, estaba ahí no, de ahí el otro malo le dice por que de ahí el le dice sueltamē no? por que lo esta (5) de ahí el sacó su corbata y el lo pone aquí en el árbol (3) de ahí le dice a el que le prometa que no lo va a sacar de ahí el sacó su paleta, de ahí se encontró o sea mucha corbata entonces el, el le prometió que no lo iba a sacar, cumplió su promesa de ahí el se puso ahí.

【訳：えっと、彼はそこにいたでしょ、そしてもう一人の悪い人が彼にどうしてと言う、そして、彼は放してと言うでしょ。それがあるから、そして彼は自分のネクタイを取った。そして、木のここに置く。そして、彼にそれを取るなと約束するように言って、自分のスコップを取った。そして、えっと、たくさんのネクタイを見つけて、だから、彼は彼にそれを取らないと約束して、約束を守った。そして、そこに置いた。】

5. 結果と考察 (5)

	児童A	児童B
聴解・再生 課題	二言語で重要IUを再生。暗示的事実関係理解可	指示語が多く、動作主事実関係のつながりが曖昧
日本語 支援	来日から1年間は毎日1時間の個別支援。3年生になってからは週1回1時間	週4日4時間の個別支援。
家庭言語	全てスペイン語	全てスペイン語
母語保持	スペイン語での教科学習(通信教育)を火・金・日に継続。年齢相応の読書力有	特になし 読み書き不可

6. まとめと今後の課題

- 談話レベルの聴解・再生力には中～高位の相関がみられる
- 日本生まれのNSCの読書力調査(櫻井2013)の結果と合わせて考察した場合、母語の談話レベルの理解力を伸ばすことは日本語力のALPの獲得にも貢献するのではないか(例:幼少期の母語での読み聞かせや内容に関するやり取り)
- 二言語の読書力調査の必要性
- 実践と仮説の検証の必要性

参考文献

- 内田伸子 (1996)『子どものディスコースの発達—物語産出の基礎過程』風間書房
- カナダ日本語教育振興会 (2000)『子どもの会話力の見方と評価—バイリンガル会話テスト(OBC)の開発—』カナダ日本語教育振興会
- カミンズ ジム著、中島和子訳著 (2011)『言語マイノリティを支える教育』慶応義塾大学出版会
- 櫻井千穂 (2013)「言語的マイノリティの子どもたちのバイリンガル読書力の発達」大阪大学大学院言語文化研究科博士論文
- Cummins, J. (1981). The role of primary language development in promoting educational success for language minority students. In California State Department of Education (ed.), *Schooling and language minority students: A Theoretical Framework*, Dissemination and Assessment Center, California State University, Los Angeles, CA, 3–49.
- Cummins, J. (2003). Reading and the ESL student. *Orbit*, 33(1), 19–22.
- Genesee, F., Geva E., Dressler C. & Kamil M. L. (2008). Cross-Linguistic Relationships in Second-Language Learners. In D. August, & T. Shanahan (eds). *Developing Reading and Writing in Second-Language Learners: Lessons from the report of the National Literacy Panel on language-minority children and youth*, A co-publication of Routledge, the Center for Applied Linguistics, and the International Reading Association, 61–93.